

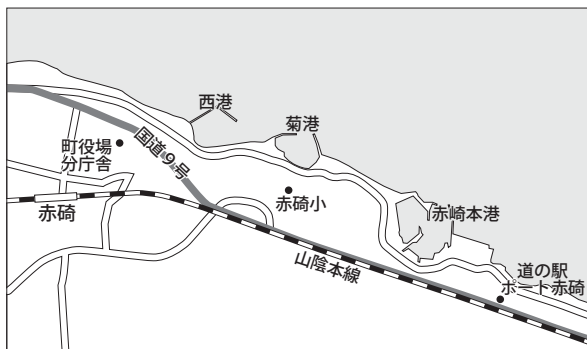


琴浦町の概要

琴浦町は鳥取県中央部よりやや西に位置し、人口約2万、面積139.9km²で北は日本海に面し南は中国地方最高峰の大山の頂に通じます。日本海に面した地域に中心市街地が発達しています。町は豊かな自然と豊富な観光資源に恵まれ、中でも、大山滝（日本の滝100選）や船上山はすばらしい景観を呈しています。産業面では農業、漁業を中心に商工業も古くから盛んです。

現在の町は、平成16年に旧赤碕町と旧東伯町が合併して誕生したもので、町名はこの地方の海岸が古来、琴ノ浦と呼ばれていることにちなんで命名されました。

古代から連綿とした歴史があり、白鳳時代の寺院遺跡、斎尾廃寺跡（国特別史跡）や鎌倉時代末期、後醍醐天皇の建武親政の礎となった船上山が



全国的にも良く知られています。記録から中世まで遡る歴史を有する寺社も現存します。江戸時代は八橋の地を鳥取藩の重臣津田氏が治め、赤碕は菊港を中心に海運で栄えました。幕末には韓国の商船が赤碕浦に漂着しその手厚い救護の史実から、道の駅「ポート赤碕」の東側に日韓友好交流公園「風の丘」が作られ、韓国との交流、町の観光振興に大きく寄与しています。

最近では、江戸時代前期の河本家住宅が国の重要文化財に、空也上人伝説で有名な転法輪寺本堂が国の登録文化財となりました。

また、国道9号線沿いの「琴浦グルメストリート」では、山海の恵みを活かした食を堪能できるお店がたくさんあり、町の魅力を全国に発信しています。

菊港の歴史

菊港のある琴浦町赤碕は、中国の明の時代の書物「図書編」（1577年成立）の中に「阿家殺記^{あかさき}」とあり、港に関する記述があります。これにより、16世紀には大陸との交易があったことが伺えます。

江戸時代には、この菊港と町の東端の逢東港（江戸時代の築堤は現存しない）が藩の十湊として位置付けられ、藩倉や船番所が置かれました。

菊港は、現在の赤碕本港、西港とともに赤碕にある港の内の一つで公的な性格を持つ港でした。



写真—1 東堤（手前は菊姫橋）



写真—2 西堤から東堤を望む

港の名称は、尼子氏の重臣で月山（島根県安来市広瀬町）落城の際、赤碕に落ち延びた河本氏の三代目に当たる当時の赤碕の大庄屋、河本長兵衛の妻「菊姫」（初代松江藩主堀尾吉晴の孫）に由来していると言われています。菊姫の次男に河本姓を名乗らせ（河本家は後の代に籠津に移住し近世は大庄屋を勤め現在に至る）、長男の子の時代に三代で断絶した堀尾姓を名乗ること許されたといい、明暦3年（1657年）の江戸の大火では消失した鳥取藩邸の修復に際し藩命により木材調達を行い江戸まで船で運ぶなど堀尾家は隆盛を極め、大いにこの港も栄えたと言われています。このような歴史から、東堤にかかる新設の橋は「菊姫橋」と命名されています。

江戸時代には、菊港は鳥取藩の藩米の積み出し港として利用されていました。海路の重要拠点として船番所が設置された菊港には、大坂に廻送する年貢米を納める藩倉が並び、船で大坂の中ノ島にある蔵屋敷まで運ばれていました（※大坂：現在の大阪のことで明治維新前までこう呼ばれていた）。

このようなことから、現存する防波堤は、「鳥取藩史」などによると、18世紀から19世紀にかけて、まず、東堤が築堤され、後に西堤が築堤されたと言われ、250年以上の時は経ていると思われます。寛政の初め（18世紀末）には藩の役人が港の修補のため訪れたという記録があることから、この時代に現在の姿になったものと推測されま

す。

明治時代中期には水深の浅い菊港にかわり、現在の赤碕本港の本格的な築港工事が始まり、その後、公的な港の機能はそちらに移りました。これも、菊港が江戸時代の姿を今に伝える一つの要因です。

卓越した土木技術と未来への継承

人頭台の玉石や大ぶりの石を積み上げて造られた東堤、西堤はその造りの精緻さから江戸後期の玉石積みの防波堤を知ることのできる貴重な産業遺産です。波の荒い日本海側で江戸期の石造防波堤が残っている例は少ないといわれています。このような、すばらしい築堤技術も現存の要因と考えられます。

西堤に比べて後世の改造が少ない東堤の先端部には小さな灯台と世界的に著名な彫刻家流政之氏による「波しぐれ三度笠」があります。

菊港は、卓越した築堤技術や歴史的景観などから、「鳥取県の景観100選」「土木学会推奨土木遺産」に選定され、東堤の海岸部は「ふるさと海岸」として整備され町民の憩いの場となっています。

また、菊港の後背台地に鎮座する神埼神社の例大祭は江戸時代から、この東堤で毎年7月27～28日に行われ「波止の祭」として多くの参拝客で賑わいます。